

「朝の読書」に関する縦断的研究の試み

中村 豊

(関西学院大学)

【要旨】

本論は、「朝の読書」と呼ばれる教育活動が全国に広まった 1996 年以降に児童生徒期を過ごしてきた大学生を対象とした調査研究である。朝の読書に関する先行研究では、高校生までの実践に基づいた質的研究や文献による理論研究が多いが、本研究では縦断的研究を試みた。200X 年に関西地区の A 大学文系の学生を対象に質問紙調査を行い、216 人分の有効回答を得た。

得られたデータについて、統計的処理を行い分析した結果、朝の読書を実施している群は、朝の読書を実施していない未実施群より統計的に読書習慣の形成に関して有意な差があることが確認できた。また、読書力という点に関して校種間の著書について比較をしたが、中学と高校では明らかな差は見られなかった。また、朝の読書の現状と課題について整理して、今後の課題について論じた。

はじめに

若者を中心とした活字離れに歯止めをかけ、読書習慣の定着に効果があると期待されている「朝の読書」と呼ばれる教育活動がある。読書の教育的意義や教育効果については様々な言説があるが、朝の読書では児童生徒の人間形成を視座においての実践に特色があり、1990 年代以降、日本各地の小・中・高等学校で広まっている。

朝の読書が始められ普及する以前、読書に関して多くの人に影響を与えた実践として、1960 年代、椋鳩十により提唱された「母と子の 20 分間読書」¹⁾をあげることができる。この取組は家庭教育における読書活動であるのに対して、朝の読書は在籍するすべての児童生徒を対象に教育活動に位置付けられて取り組まれている。1970 年代には、担任教諭が学級単位で一定時間読書活動を学級経営に取り入れる実践も見られたが、朝の読書とは区別されている。本論でいう朝の読書とは、小学校・中学校・中等学校・高等学校・高等専門学校において教育課程に位置付けられた授業が始められる前の一定時間、全校一斉で、一人ひとりの児童生徒が自分で選んだ本を黙読する教育活動である。この朝の読書は、千葉県船橋学園女子高等学校（現在は東葉高等学校）で 1988 年に始められた実践²⁾を契機として現在に至っている。

朝の読書が 1990 年代後半から急速に広まっていった背景には、教育現場における草の根的な普及啓発活動や朝の読書に関わる任意団体の設立、平成 10 年度に告示された学習指導要領の実施に伴い新たに設けられた「総合的な学習の時間」や、いわゆる「ゆとり教育」批判への対応として示された「学びのすすめ」³⁾の影響、読書に関する法律の制定⁴⁾など様々な要因をあげることができる。しかしながら、平成 20 年度告示の学習指導要領への移行期間が前倒しで実施されるとともに朝の読書の見直しを図る学校が増えつつある。

朝の読書に関する研究は、小学校・中学校・高等学校等、教育現場における児童生徒の感想や実際に読まれた本の種類及び冊数の統計、教師の観察により得られた学校生活上の児童生徒の変容、黙読以外のバリエーションとしての読書活動の実践報告、朝の読書における教師と生徒との関わり方、朝の読書を導入するまでのハウ・ツーや継続発展させていくための工夫など教育実践を核としながら多岐にわたっている。また、朝の読書の機能や教育的意味について、実践校からは類似した内容の報告がされており一定の評価と支持を得ている。

本論では、朝の読書が全国に広まった時期に児童生徒期を過ぎてきた大学生を対象として行った質問紙調査に基づき、次に示す構成で朝の読書に関する縦断的研究を試みた。問題と目的では、読書に関する青少年の現状と学校教育に見られる変化と課題を挙げ本論の目的を述べた。方法及び結果では、質問紙調査の内容と結果について分析し、統計的処理を行い整理した。考察では、学校教育や社会の現状をふまえて朝の読書について再検証した。おわりに、本研究の成果と今後の課題を示した。

1. 問題と目的

近年、朝の読書の全国的な普及（図1）がみられる。朝の読書に関わる有力な任意団体の一つである「朝の読書推進協議会」が1996年以來続けている「朝の読書の実施状況」調査⁵⁾に拠れば、現在の日本の学校では、小学校16,385校(74.6%)、中学校8,130校(75.4%)、高等学校1,997校(40.7%)、3校種の合計では26,512校(70.4%)が朝の読書を実施している。義務教育段階では原則的にすべての子どもが、高等学校等への進学率が97.9%⁶⁾であることを考えると、多くの児童生徒が本に接する機会を得ていることが分かる。

全国学校図書館協議会が毎日新聞社と共同で毎年行っている、全国の小中学校及び高等学校の児童生徒の読書状況調査結果⁷⁾を次に示す。

2009年5月1ヶ月間の平均読書

冊数は、小学生8.6冊、中学生3.7冊、高校生1.7冊であった。本調査では、5月1ヶ月間に読んだ本が0冊の生徒を「不読者」と呼んでいる。今回、不読者の割合では、小学生5.4%、中学生13.2%、高校生47.0%となった。これらの調査結果、5月1ヶ月間の平均読書冊数と不読者の推移について、朝の読書推進協議会が統計を取り始めた1996年以降を基準に校種別に示したのが図2-1及び図2-2である。

本（雑誌やマンガを除く）を読むことが「大好き」または「どちらかといえば好き」を聞いた結果は、合わせるとそれぞれの校種ともに7～8割が「好き」と答えている。このことは、同じ質問をした2001年調査結果（小学生80%、中学生62%、高校生61%）に対して中学生と高校生において読書好きが増加していることを示している。この要因について、

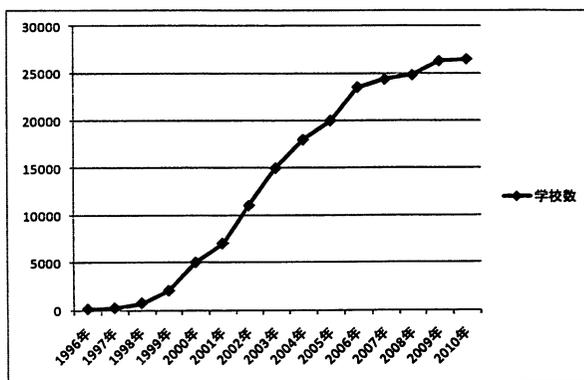


図1 「朝の読書」の実施状況の経年推移

(※「朝の読書」運動の歩み(朝の読書推進協議会)を参考に作成)

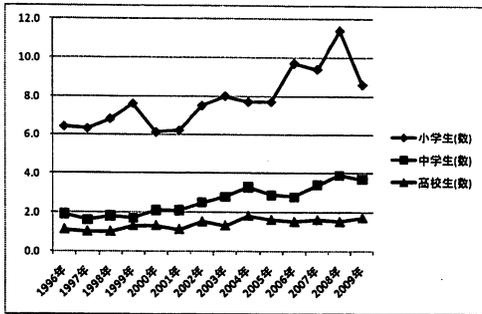


図2-1 5月1ヶ月間の平均読書冊数

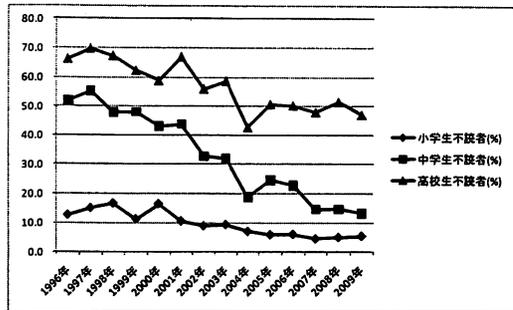


図2-2 不読者の推移

(※社団法人全国学校図書館協議会「第55回読書調査」の結果を参考に作成)

読書世論調査を実施している毎日新聞社の新聞記事では特集の中で、「本好き増やす一斉読書」「学校の一斉読書の普及で小学生の時から読書する習慣が身につくようになったことが、中高生の本好きを増やしているのではないだろうか」⁸⁾と分析している。

他方、全国の16歳以上の男女を対象とした「第62回読書世論調査」結果⁹⁾を見ても、総合読書率(雑誌読書率と書籍読書率の合計)は良好な状況であることが報告されている。しかし、「第63回読書世論調査」結果によると、1カ月に読む書籍は平均1.5冊で、「最低1冊は読む」人の割合が5割を切ったと報道されている¹⁰⁾。これは、2008年9月のリーマン・ショックに始まる世界的経済不況及び日本国内における経済の低迷や高い失業率などが関連していると考えられるので、一概に読書への興味関心だけの視点では説明が難しいものと思われる。

さて、3つの統計資料をとおして青少年における読書の現状を見てきたが、小中学生が概ね良好な読書習慣を身に付けてきたことに対して、高校生については一層の改善を図っていく必要があるように思われる。高校生では、小中学生に比べて通学時間や部活動時間の増加、アルバイト、受験準備のための学習時間の増加等、様々な要因により読書時間の確保が難しい面がある。故に、学校生活における読書時間の確保が必要であり求められるところである。朝の読書の実施率が上昇してきているとはいえ、40%程度というのが実態である。さらには、社会全体でみると読書離れが改善されるまでには至っていない。近年では、朝の読書を推進してきた教育行政の動向にも変化が見られる。具体的には、朝の読書の実施から朝の学習(国数英に関連する三科目のドリル学習)へと転換する学校が増加傾向にある。この動向にいち早く危機感を持った、朝の読書の発案者である林(2007)は著書の中で次の3点を指摘している¹¹⁾。①朝の読書実施調査において高校では低い水準であるが、高校を卒業すると本を読むチャンスはさらに少なくなる可能性があるため改善を要する。②「読書よりも計算や漢字ドリルのほうが大切である」「読書よりも進学のための受験勉強のほうが重要である」といった考え方が、依然として現場の教師の半分、いやそれ以上に根強く存在している。③「文部科学省や教育委員会がやれというからやるだけ」という学校も多い。

上述した林(2007年)の指摘は、これまでに朝の読書の実施校を順調に伸ばしてきた推移から考えると、一気に減少に転じる可能性を示唆している。しかしながら、朝の読書について、現在の児童生徒側からは、どのように捉えられてきたのかについて言及した記述は

見られない。換言すれば、朝の読書の「4原則」¹²⁾（みんなで、毎朝、自分が好きな本を、ただ読むだけ）をふまえた活動について、①個人内の読書力がどのように高まるのか。②児童生徒の視点からは朝の読書はどのように捉えられているのかについて、学年や校種を越えての縦断的研究は見られない。そこで、本研究では大学生を対象とした質問紙調査を手がかりとして、改めて朝の読書の教育的価値について探っていくことを目的とする。

2. 方法

現在の大学生の多くは、朝の読書が急速に普及してきた時期に児童生徒期をおくっている。そのため、朝の読書を学校で経験してきている確率が高いと考えられる。しかしながら朝の読書に関わる調査は、その対象が小学生、中学生、高校生までと限定されており、高校までに培われたと思われる読書力¹³⁾や、児童生徒が朝の読書をどのように捉えてきたのかを知ることができない。そこで、大学生を対象とした調査研究をすることにより、朝の読書に関して児童生徒の視点から新たな意味付けをすることが可能となり、読書力についてもどのような傾向があるのかを知ることができると考え、質問紙調査を次に示す手続により実施した。なお、得られたデータについては統計的に処理し、個人が特定できないようプライバシーに配慮した。

(1) 調査対象：本調査は、関西地区のA大学における文系学部の大学生である（表1）。

表1 調査対象

	男子(人)	女子(人)	合計(人)
1年生	47	80	127
2年生	3	18	21
3年生	13	36	49
4年生	9	12	21
その他	0	1	1
合計	72	147	219

(2) 調査時期

2009 年前期に行われた4つの講義時間に集団法により実施した。

(3) 調査内容

朝の読書推進協議会が1996年以降実施している質問項目を参考に筆者が作成した。

質問紙の内容は、性別(男女)、学部(9学部から選択)、学年(1～4学年に「その他」を加えて選択)、小学校・中学校・高等学校毎の朝の読書の実施状況(有無の二者択一)、週あたりの回数(毎日・4日・3日・2日・1日)、朝の読書時間(10分・15分・20分・「その他」)、教室内における教師の有無と教師の読書の有無(はい、ときどき、いいえ)、朝の読書に関する個人評価を7段階評定(とても楽しみ・楽しみ・やや楽しみ・どちらともいえない・やや苦痛・苦痛・とても苦痛)で選択させた。また、意見や感想(自由記述)、学校の所在地(都道府県)と設置者(国立・区市町村・私立・その他)、読書習慣の形成の有無(はい、いいえ、どちらともいえない)、校種毎の思い出に残る本(小学校は1冊、中学校は2冊、高等学校は3冊までの著者と著名を記述)についての回答を求めた。なお、朝の読書の経験がない学生には、現在の立場で、それぞれ自由記述で回答を求めた。

(4) 調査方法

講義終了20分前に調査用紙を配布し、調査の目的と回答方法について説明を行った。調査用紙に回答欄を設け、無記名で各自が自分自身の過去をふりかえることにより15分程度を目安に実施した。時間内に記述が終わらない学生に対しては、さらに10分間延長して調査を継続した。回収方法は、教室退出時に所定の場所におくように指示した。

3. 結果

回答を校種別に整理したところ 219 人分のデータが得られた。表 2-1 に示したとおり、朝の読書の経験がない学生は 54 人 (24.7%) であった。これは、朝の読書推進協議会が実施している全国調査のデータと比較しても妥当性があると見てよいだろう。また、在籍したすべての学校（小学校～高校）で朝の読書を経験してきた学生は 22 名 (10.0%) である。

表 2-1 に示したデータを校種別に整理したものが表 2-2 である。それぞれの学校での実施率を見ると小学校 (60.7%)、中学校 (41.6%)、(21.1%) であり、先述した現在の全国データと比較すると全体的に低い値であることが分かった。このことに関連して学校の設置者について整理したのが表 3 である。小学校での公立在籍率は (89.0%)、中学校 (68.0%)、高校 (58.0%) であった。「その他」は在外施設などの学校を表している。

朝の読書を経験してきた学生の週当たりの実施回数は、表 4-1 に示したとおりである。毎日実施していた学校の割合は、小学校 (63.9%)、中学校 (62.6%)、高校 (57.9%) であった。小学校では、定例の全校朝会の他にも体育的集会や音楽的集会、児童会活動としての集会など、多岐にわたる各種集会が開かれる実態がある。また、漢字や計算など基礎学力向上を目指したドリル学習を課している学校も多いために、毎日実施することは難しいといわれている。全国の校種別データと比較できないが、校種すべてを合計した学校数での毎日実施が 34.4%¹⁴⁾であることをみると今回の結果は極めて高い実施率といえそうである。

朝の読書の実施時間は、小中ともに 15 分間が最も多く、各校種でみても 10 分以上の実施が大部分であることが分かった。この値については校種を込みにした全国データと比べ

表 2-1 「朝の読書」の経験パターン

小学校	中学校	高等学校	人数
○	○	○	22
○	○	×	43
○	×	○	5
○	×	×	63
×	○	○	5
×	○	×	21
×	×	○	6
×	×	×	54
合計人数			219

表 2-2 校種別「朝の読書」の有無

	小学校	中学校	高等学校
実施	133	91	38
未実施	86	128	180

表 3 学校の設置者

	小学校	中学校	高等学校
国立	8	12	9
公立	195	149	127
私立	13	55	79
その他	3	3	4
合計	219	219	219

表 4-1 「朝の読書」の回数 (週日数)

	小学校	中学校	高等学校
毎日	85	57	22
4日	5	3	4
3日	16	12	4
2日	11	4	2
1日	16	15	6
合計	133	91	38

表 4-2 「朝の読書」の時間

	小学校	中学校	高等学校
10分	49	37	18
15分	60	39	14
20分	21	10	5
その他	3	5	1
合計	133	91	38

表 5-1 「朝の読書」と教師の有無

	小学校	中学校	高等学校
いる	81	54	24
いる・いない	48	26	10
いない	4	11	4
合計	133	91	38

表 5-2 「朝の読書」と教師の読書

	小学校	中学校	高等学校
読書	75	41	20
読書・しない	42	33	10
しない	16	17	8
合計	133	91	38

て10分間と15分間の割合が逆転しているが、妥当な範囲であることが確認できた。

表5-1と表5-2に示したのは、朝の読書の時間に教師が教室にいないか否か、教室では教師も読書をしていなかったか否かを聞いたものである。それぞれ校種別に「いる」を選択した割合は、小学校(60.9%)、中学校(69.3%)、高校(63.2%)であった。また、教師も「(毎回)読書をしてきた」割合は、小学校(56.4%)、中学校(45.1%)、高校(52.6%)であった。このことから、先述の朝の読書「4原則」が十分には徹底されていない実態や、多様な実践例があることが分かった。続いて、「思い出に残る本」(自由記述)を集計して回答の多かった上位20冊を表6に示す。

表6 「思い出に残る本」校種別一覧

順位	小学校	中学校	高等学校
1	『ハリーポッター』	『ハリーポッター』	『こころ』
2	※特になし	『はとよばれた子』	『ハリーポッター』
3	『ハッピーバースデー』	『世界の中心で愛を叫ぶ』	『リアル鬼ごっこ』
4	※覚えていない	『羅生門』	『世界の中心で愛を叫ぶ』
5	『エルマーの冒険』	『青空の向こう』	※特になし
6	『解決ソロリ』	『五体不満足』	『人間失格』
7	『五体不満足』	『三国志』	『舞姫』
8	『2分間の冒険』	『吾輩は猫である』	『恋空』
9	『スイミー』	『missing』	『白夜行』
10	『わかつたさん』	『音の炎』	『ガリレオ』
11	『イチロー～努力の天才バッテリー～』	『赤毛のアン』	『博士の愛した数式』
12	『こまったさん』	『アルジャーノンに花束を』	『源氏物語』
13	『ズッコケ3人組』	『こころ』	『ダヴィンチコード』
14	『晴れときどききぶた』	『シャーロックホームズ』	『ダレン・シャン』
15	『十五少年漂流記』	『ダレン・シャン』	『西の魔女が死んだ』
16	『アンネの日記』	『沈黙』	『バッテリー』
17	『怪人二十面相』	『バッテリー』	『星の王子様』
18	『ぐりとぐら』	『坊ちゃん』	『夜のピクニック』
19	『三国志』	※特になし	『檸檬』
20	『空色勾玉』	『星新一シリーズ』	『14TEEN』

表6は、本調査における学生が回答したものであるが、小学校1位11名・2位10名、中学校では1位41名・2位13名、高校では1位21名・2位16名が挙げた本である。その時代のベストセラーから文芸書の定番が上位を占めている。

朝の読書についての意見や感想を集約したところ181人(82.6%)分であった。その内、朝の読書経験者からは136人(82.4%)の記述が得られた。この記述内容をKJ法により、朝の読書に対して「肯定」、「肯定と否定」、「否定」の3種類に分類したものが表7である。

すべての学校で経験をしてきた22人の記述に注目し、内容を分類したところ次のようになった。

朝の読書の実施に、肯定12人、肯定否定の両面5人、否定2人、空欄3人。

この他、朝の読書への意欲と評価については表8と図3に、読書習慣の形成については表9にと図4に示した。

なお、図3では、表8の7段階評定について、「とても楽しみ.楽しみ.やや楽しみ」を肯定に、「やや苦痛.苦痛.とても苦痛」を否定として人数を示した。

表8に関して、校種毎の朝の読書の有無と読書習慣形成について χ^2 検定を行ったところ、小学校、中学校、高等学校それぞれについて、有無の2群(実施、未実施)と読書習慣形成の3群(形成、未形成、不明)との間に小学校・中学校では5%水準、高等学校では1%水準で有意な差が見られた(表10)。

表7 朝の読書の捉え方

内容	人数	(%)
肯定	85	62.5
肯定否定	36	26.5
否定	15	11.0
回答総数	136	100.0

表8 「朝の読書」への意欲

	小学校	中学校	高等学校
とても楽しみ	16	9	5
楽しみ	18	14	7
やや楽しみ	36	23	8
どちらとも	41	28	13
やや苦痛	17	11	3
苦痛	4	5	0
とても苦痛	1	1	2
合計	133	91	38

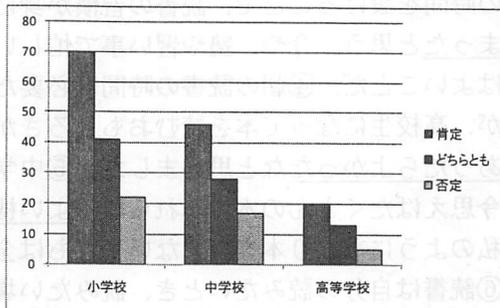


図3 朝の読書の評価

表9 読書習慣の形成

	小学校	中学校	高等学校
はい	73	68	61
いいえ	93	106	103
どちらとも	53	45	55
合計	219	219	219

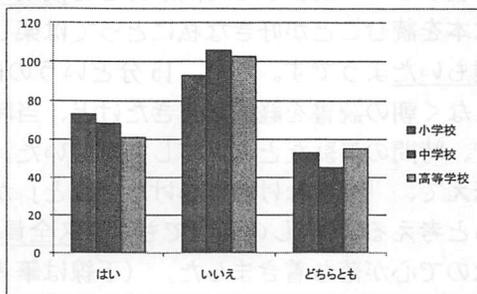


図4 校種別読書習慣の形成状況

表10 校種別「朝の読書」経験と読書習慣形成の有無と χ^2 検定の結果

校種	χ^2 値	自由度		読書習慣	形成	不明	未形成
小学校	7.76	2	*	実施	46	39	47
				未実施	27	13	44
中学校	8.56	2	*	実施	34	22	34
				未実施	33	20	73
高等学校	18.96	2	**	実施	20	10	7
				未実施	40	43	96

* $p < .05$ ** $p < .01$

4. 考察

本調査の結果より、朝の読書を実施している群は、朝の読書を実施していない未実施群より統計的に読書習慣の形成に関して有意な差のあることが確認できた。また、読書力という点に関しては、著書のジャンルから比較すると、小学校から中学校において、児童書から一般書へと変化が見られた。中学校から高等学校では明らかな差は見られなかった。本調査では、「朝の読書」について、あなたの考えを述べてください」という項目で、回答者である学生自身の児童生徒期を想起しての記述を求めている。そこでは、肯定及び肯定否定を合わせると89%の肯定的評価を得ることができた。

代表的な意見を次に示す。①学校での読書の時間のおかげで読書の習慣がついたのでとても役に立った。本を読むのが楽しくなり、家でも読むようになったのでとてもいいと思っています。②高校の朝の読書でいろいろな本を読み、自分の価値観が変わったなあと思

います。それは小学校の頃から朝の読書が習慣づいているのだからと思います。③学校で読書の時間を設けることで、読書の習慣が身についた。落ち着くこともできたため集中力が高まったと思う。今や、塾や習い事で忙しい子ども達にとって、朝の読書の時間を設けるのはよいことだ。④朝の読書の時間は必要だと思います。私は高校の時しかなかったのですが、高校生になって本を読むおもしろさが分かりました。もっと早い段階で読書の時間があったらよかったなと思いました。⑤中学生の頃は正直面倒くさいと思っていましたが、今思えばたくさん本にふれられるよい機会だったなと思います。その時間がなければ、私のようにあまり本を読まない子どもは全くといっていいほど本を読まないと思います。⑥読書は自分の読みたいとき、読みたい場所とするものだと思うので、教室という人がたくさんいる所でみんなで読むというのは落ち着かず真に読書を楽しむことができないのではないと思う。ただ、普段本を読まない人にとっては本にふれるよい機会だとは思う。⑦朝ゆっくり読書する時間があると授業にも集中できるのでよいと思います。⑧朝の読書は本を読むことが好きな私にとっては楽しみな時間でしたが、つまらないと感じている友達もいたようです。ただ、15分というのは中途半端な長さのように感じていました。⑨何となく朝の読書を経験してきたけど、当時は何のためにやっているか理解できなかったので、時間の無駄だと考えてしまっていた。読書習慣をつける意味を子どもに分かりやすく伝えて、「やらなければいけないこと」から「進んでやること」に意識転換する必要があると考える。⑩少しの時間でもクラス全員が静かにして集中できる時間が好きでした。静かなので心が落ち着きました。（下線は筆者）

①～⑩の記述より、児童生徒側の視点としては、無条件にすべてを受け入れてはいないが、概ね読書指導と生徒指導の面から肯定的に評価をしていることが分かる。この傾向については、朝の読書に関する先行研究である葉袋¹⁵⁾の発表にも見ることができる。また、朝の読書は読書指導に特化して行われている活動ではなく、生徒指導面が強いことにも考慮しておかなければならない。換言すれば、学級担任の適切な指導と学級経営の力量が欠かせないのである。そのうえで、生徒指導的な意味での豊かな人間性を育てていくために朝の読書が必要なのである¹⁶⁾。

読書が持つ教育的意味としては、「追体験¹⁷⁾」、「自己教育¹⁸⁾」、「自己教育を支える自己概念の育成¹⁹⁾」等を挙げることができる。また、暴力行為と自己制御あるいは防御の観点から、感情脳とも呼ばれる「辺縁系」と読書の関連についての指摘もされている²⁰⁾。

朝の読書に直接の関係はない「練習」という観点では、「毎日の生活リズムの中で、この練習に最初からそのために予定された一定の時間を割り当てることが有益だと思われる。恐らくは朝の時間、特に一日の仕事を始める前が、そのために適している²¹⁾」と朝の意味が指摘されている。このことは朝の読書の本質を考える際、朝に行う意義を再認識させてくれる。

これまでに、学生への調査結果から朝の読書について検証を行ってきた。その中で、朝の読書が教育活動として十分に成立していること、カリキュラム化されていないにも関わらず着実に実施校が増えてきている背景には、生徒指導としての役割があることが確認できた。しかしながら、この教育運動ともとれる動向が単なる流行であるならば衰退していくのも早いという危うさがある。実際に、朝の読書の推移を見ていると近年の伸び率は決して順調とはいえない。全国に約4万校ある学校すべてに定着するかと問われれば、疑問

を持たざるを得ないのが実情である。それは、学習指導要領における狭義の学力向上への転換（「脱ゆとり」）、旧国公立大学における入試改革による受験科目数の増加、電子メディアによる電子ブックの影響等、様々な影響を受け、朝の読書の意義が各実施校に問われていることに対し、教師側がその必要性を主張できないのではないかと危惧しているからである²²⁾。何よりも、本研究で示した縦断的な研究によるエビデンスに基づいたデータが不足しているために、朝の読書を児童生徒の発達段階を見通してのライフスキルとして意味付けることが十分にはできないまま現在に至っているものと思われる。

おわりに

本研究は、大学生を対象とした試行的な研究でありデータには偏りがある可能性を含むが、高校生から先の年齢層において朝の読書について検証したものである。今まで順調に発展してきた朝の読書であるが、転換期を迎えているのは確かである。これからは、短い在籍期間だけでの検証だけではなく、社会人までを調査対象とした縦断的な研究が一層必要になってくるものと考えられる。本研究は、その先駆けとして一定の役割を果たせたものと考えている。しかし、本論で示してきたことには、限定された結果であるという面がある。他地域の大学生や学部・学校の違いでも表れるのかについてはさらなる調査が必要である。また、中卒者や高卒者（専門・専修学校等への進学者を含む）には、朝の読書がどのように評価されているのかについてもさらなる調査をしていくことが求められる。

朝の読書には様々な効果があるが、単に読んでいればよいというわけではない。例えば、「わからないことがあっても気にならない」学生の実態が「読み飛ばし」²³⁾にあることが指摘されているが、適宜適切な読書指導も必要なのかもしれない。このことに関しては、フランスの高校における読書指導の事例²⁴⁾はヒントを与えてくれる。ただし、これは朝の読書「4原則」にふれることなので、朝の読書の基幹を問い直すことになる。朝の読書が始められての歴史は比較的浅いことを考えると、朝の読書で育ち学校を離れて社会人となった人々の中で論議されることが不可欠である。その時には、今とは異なる視点から朝の読書を再評価することができるものと思われる。これらのことが今後の大きな課題である。

注記・引用文献

- 1) 椋 鳩十『母と子の 20 分間読書』あすなろ書房、1961
- 2) 船橋学園読書教育研究会『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993
- 3) 2002 年 1 月 17 日、当時の遠山文部科学大臣により文部科学省は、「たしかに学力の向上のための 2002 アピール『学びのすすめ』」を発表した。これは、新しい学習指導要領の全面実施を目前に控えた時期に、学力低下論を受けての内容となっている。その中に、2001 年 12 月に公表された OECD の「生徒の学習到達度調査」結果である「趣味として読書をしない」子の割合が参加国中最低である問題点を指摘し、朝の読書について次のように言及している。「学校においては、例えば朝の読書などが、読書本来の効果に加え、児童生徒の集中力を高め、授業への姿勢をつくる上で効果を挙げているとの報告もあります。」「朝の読書など、始業前学習を推奨・支援する。」
- 4) 第 153 回国会において、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が成立し、平成 13 年 12 月 12 日付けをもって、法律第 154 号として公布され、同日施行された。

- 5) 「朝の読書」の実施状況（平成22年4月2日現在、朝の読書推進協議会調べ）
http://www1.e-hon.ne.jp/content/asadoku_bunseki.html、2010年4月23日参照）
- 6) 文部科学省「平成21年度学校基本調査速報 調査結果の要旨」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282588.htm 2010年4月23日参照）
- 7) 社団法人全国学校図書館協議会「第55回読書調査」結果
（<http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html> 2010年4月21日参照）
調査項目は、毎年定例項目と特設項目からなる。定例項目は「5月1か月間に読んだ本の冊数」「読んだ本の書名」「5月1か月間に読んだ雑誌の冊数」「ふだん読んでいる雑誌名」である。2009年度の特設項目では、「情報の入手と新聞」「読書は大切か」について調査が行われた。
- 8) 「第55回学校読書調査」毎日新聞、朝刊、特集面、2009.10.27、14-15頁（山口昭、福田昌史、相良美成）
- 9) 毎日新聞社『読書世論調査2009年版』毎日新聞東京本社広告局、2009
- 10) 「あすから読書習慣」毎日新聞、朝刊、特集面、2009.10.26、11頁（佐々本浩材）
- 11) 林公『朝の読書 その理念と実践』編集工房一生社、リベルタ出版（販売）、2007、6-7頁
- 12) 林公編著『心を育てる朝の読書』教育開発研究所、1999、5頁
- 13) 齋藤孝『読書力』岩波新書、2002、9頁。本書の中で齋藤は「読書力がある」ということは、読書習慣があるということでもある。読書が苦にならずに日常で何気なくできる力、これが読書力である。」と述べている。
- 14) 前掲、（平成22年4月2日現在、朝の読書推進協議会調べ）
- 15) 葉袋秀樹「朝の読書の効果について—朝の読書に関する単行書の分析—」日本生涯教育学会第30回大会自由研究部会Ⅲ発表資料（2009.11.7）
- 16) 朝比奈大作・米谷茂則『読書と豊かな人間性』日本放送出版協会、2009、54頁
- 17) 前掲、林公編著、1999、99頁
- 18) 山田由美子「言語発達と表現活動」（北尾倫彦編著『自己教育の心理学』有斐閣選書）、1994、115頁。ここでは、自己教育力に欠かせないものとして、「より広く読書をする習慣を子どもたちに身につけさせたい」と指摘している。
- 19) 梶田叡一『子どもの自己概念と教育』東京大学出版会、1985、178頁。本著では、豊で強靱な学習主体を育てるために、「学校の勉強とは関係のない本を自分の興味でどんどん読んでいくようなしっかりした読書習慣が身についてほしい」と示されている。
- 20) パリー・サンダース、杉本卓訳『本が死ぬところ暴力が生まれる』新曜社、1998、49頁
- 21) O. F. ボルリ、岡本英明監訳『練習の精神』北樹出版、2009、176頁
- 22) 前掲、林公(2007)、7-8頁。本書の前書きにおいて林は次のように指摘している。「早い話が、日本では、仮に無数の教育改革が実行されたとしても、いや、されればされるほど、教師という人間集団の個人個人の質が変わらなければ、日本国民集団は何度でも昔と同じ過ちを犯し続けるでしょう。」
- 23) 内田樹『下流志向』講談社、2007、22頁
- 24) 辻由美『読書教育』みすず書房、2008